
聖夜の夜に銃声を

隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜の夜に銃声を

【Nコード】

N6175Z

【作者名】

薩

【あらすじ】

個人で冊子に投稿します

真冬。

寂れた酒場のカウンターで、

「空しいものだ、世の中は常に廻り続けているんだ、俺をのぞいては。」

と青年カポネはひとりごちた。

カポネといつても、名前が同じだけで、暗黒社会を牛耳っていた伝説のボスではない。

むしろ、ああいう勝ち組になってみたいものだ。

と青年は心の底からそう思っていた。

そして、自分のような人間を英語では *underdog* 負け犬と
いうのだったと、思い出す。

青年はなんだか無性に情けなくなつて、手元にあつたブランデーをグラスに満たすと、不満と涙を無理に胃袋に押し戻し、続いて深いため息をついた。

酒という代物は、青年にとってある種、女よりも魅力的だった。

この琥珀色の液体は、悩める青年の喉をまるで歌うかのように何とも快い速度で駆け下り、

かと思えば燃え盛る聖火の如く腹の底からじわじわと喉を焼いてくるのだ。

なんという悦楽！

この瞬間だけは、大金持ちだろうと貧乏人だろうと、勝ち負けな

ど関係なく、酒の神であるバツカスに、感謝の意を表さざるおえないだろう。と青年は確信している。

しばらくの間、遠い眼をして、グラスを傾けながら物思いにふけていた彼だったが、ふと、目の前の人影に気付いた。

その人影というのは、この店の店主である老紳士だった。

金縁の眼鏡にロマンスグレーの頭髮が印象的な、いかにも知的と思われる、それでいて、独特な存在感を放っている人だ。

この酒場を初めて訪れた時から、もう五年以上の付き合いになる、

青年が唯一気が置ける人物であつた。友人とまでは、いかないがどこことなく、懐かしい気もする。

老人は穏やかな笑みとともに、

「やけ酒は、体に良くありませんよ。」と告げた。

その言葉に青年は、

「放っておいてくれよ、マスター。」と半ば消え入りそうなか細い声で答えた。

自分を氣遣つてくれようとする、その優しさが、今の青年には、どんな罵倒や暴力よりも酷い痛みを伴うものだった。

それがどれ程のものは、当の本人でなければ、解るまい。

老人の方はというと、
彼の心情を知ってか知らずか、そつと青年にタバコを一本差し出した。

それは老人が、長年愛煙している銘柄で、すこしラムの香味がする、喫煙家なら誰でも目にしたことがあるポピュラーな代物だった。

「貴方なら、これくらいの重さのある紫煙の方が好みかな、と思
いましてね。」

自分好みだと、店主の独断と偏見により渡されたそれを、青年は受け取り、ジッポーで火を点す。

そしてゆっくりと煙を肺に、いれてやる。

中々だ…悪くはないな。と彼は頭のすみに残ったわずかなスペースで感想を綴り、息を吐いた。

視界に一時的にだが、独特な香りの霧が立ち込める。

やがて、癖のある重い煙に少し目眩を覚えながら、おもむろに青年は口を開いた。

「いいタバコだ、だが…俺には少し強すぎるかもしれない。」

そう青年が、感想を述べると、老人は

「そうですか、いえね…貴方があんまり哀れに思えたのと、タバコの感想が聞きたかっただけですよ。」

とさも気まぐれと云うような口調でそう言った。

と青年はムツとして捨て鉢になった。

「解っているのなら、どうしてそんなことを・・・口に出すんだ！」
不快感をあらわにして、青年は老人に言い寄る。

「それでこそ、甚振りがいがあるというものだ・・・興味深いですよ。」

喜劇を見るかのような目で、老人は青年を射抜く。

「とつとと、死んじまえ・・・この・・・」

「『クソジジイ』ですか？カポネ君？」

「！！」

青年は、一瞬、一瞬だが・・・老人からただならぬものが、威圧という言葉を凌駕する内臓をえぐりだされるような雰囲気を感じ、動けなくなつた。

「あんた・・・何者だ？一般人じゃないだろう？」
震える声で紳士に問う。

あれだけの歲月付き合いがあると云うにも関わらず、

まるで別人のように感じてしまうほど、それは、強烈なものだった。

やがて、二人の間に長い沈黙が訪れた。

青年は内心とてもうろたえていた。この空気をいかに打破しようか？

また、

なんて愚かな事をしたのだ・・・と自分を叱責さえた。

この人はむこう側の人間じゃないと、なぜ悟る事が出来なかったのだろう・・・

青年がまだ駆け出したばかりのころである、スラム街の生まれである力ポネは金欲しさに薬の売買を生業とする組織に片足を突っ込んだ。

やはりそれだけでは、生活は苦しいままであったので、窃盗や、違法賭博で食いつなぎ

拳句の果てには仲間内の金を使い込んでしまった。

その事が、所属していた組織の面々に露見し、半死半生の目にあった。

命からがら逃げ出したかと思えば、追手がかり、もう駄目だ、

死ぬのだろう、自分は。と半ば腹を括っていた時、初めて老紳士と出会ったのである。

『おい、アンタ・・・俺をかばってくれるのはいいが、アンタまでとばっちりをくうぞ！』

そう、自分が言ったのを、今でも鮮明に覚えている。

しかし、紳士はいたって普通に『大丈夫、慣れてますから、ここだけは・・・安全ですよ。』

と・・・たしか、そう、言っていた。

何故・・・安全なのか・・・

それは・・・

「私の名は、ルチアーノ、ラッキー・ルチアーノです。」

突然響いた紳士のテノールに、青年の思考回路は完全に停止した。

なんだって？今何て言った？！

ルチアーノ・・・あの大ボスの？

「君をずっと、探していたんだ、アルと同じ名前の哀れな青年を」

探していた？この、俺を？

あまりに唐突過ぎて、言葉が見つからない。

それでも、紳士は淡々と話していく。

「私は、アル・カポネとは、何十年と付き合いがありましたね、裏社会を出てからはこうやってしがないバーをやっています。」

話を聞くと、どうやら、ルチアーノの戦友であり一番の理解者である、アル・カポネ（通称、ドン）は今、病に体を蝕まれておりもう長くないのだそうだ。

弱体化してゆく友人の組織の為、そして何より親友として、何か出来る事はないかと尋ねたところ

影武者がほしい、と言ってきたそうだ。

ドンが言うには、「私も、もう若くはないし戦えないだろう、いつ撃たれたっておかしくないのだ・・・」

せめて残りの短い期間は家族と共に過ごしたいと、影武者にもなりえるトップ代理を欲しがっていた。

願いを聞いたルチアーノは、出来る限り色々なコネや組織から、有望な人材を集め、だれがふさわしいかを双方の幹部と、検討していたそうだ。

しかしなかなか、いい者がおらずあぐねていたそうで、最終手段として、手当たり次第にバーの客や、裏通りの住人のリストを物色していた。

「で、目に留まったのが、俺ってわけか？」

信じられないという眼差しを青年はルチアーノに向ける。

「のし上がってやろう、という気持ちが人一倍強いように私には思えました。」

ルチアーノはやさしい笑顔に戻って、答えた。

「それに、あなたはきつと下の者たちの事も、考えて行動できると思います。」

「ならなぜ、もっと早くに・・・」

青年は問う。

「世界的組織を束ねるんですから、それなりの人材なのか見極めなければ、ね」

と紳士は答える。

ああ、そうか、青年は納得した。

この人は、はなから、俺だと決めていたのか・・・はたまた、計算の内かもしれないが

初めて会ったときから、何か起こりそうな気がしていたよ、と

「勝ちなさい、勝つて思う存分のし上がりなさい、だって貴方は生まれついてそのための武器を手に入れているのだから。」

これは饞別だと、銀の鈍く光る銃を一丁ルチアーノは青年に渡した。
グリップの処にライオンの頭部と髑髏が彫られてある

素直に、美しいと感じた。

店を出ると雪が舞っていた。銀色の銃によく映える。

今日は、聖夜だと云う事を思い出した。

しかし、踏みとどまることはできない、踏みとどまれば、死が待っている。

神への冒瀆だと嘲笑うなら、嗤えばいい。

しかし、もう運命は動き出している。
あとは、

上がってゆくだけだ。

(後書き)

ごめんなさい！グダグダです・・・
もっと渋い感じにしたかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6175z/>

聖夜の夜に銃声を

2011年12月20日19時52分発行